



大学生の頃、僕は大阪・梅田の地下街にある「花直園芸」というお花屋さんでアルバイトをしていた。アルバイトと言っても、当時の僕としてはとても真剣で、もし水中写真家という職業に出会わなければ、僕はお花屋さんになっていたかもしれない、と断言できるほど入れ込んでいた。ただ、花に興味があるということだけで始め、最初は何も分からなかったが店長や先輩の指導のもと、いつからか花束を作り、アレンジメントを挿すようになっていた。

花束の注文パターンで多かったのが、「3000円で適当に見繕って」、または「赤バラを入れて5000円で」、などというものだった。また時折、白い花を基調に淡い色のトーンで纏めるなど、花を選ぶ時点からセンスの良さが伝わるお客さんもいた。そんな時は、特に難しい課題を渡されたように戸惑うことも多かったが、1本1本、花をまとめることで、手のひらの中で何か形になっていく様子はとても楽しかった。ショーケースに並ぶアレンジメントも含め、花という素材を使って「作品」作りを楽しんでいた。結局、大学にはほとんど行かず、多くの時間を花屋で過ごした。

当時、好きになった花のひとつに、白のブバルディアという花がある。あんまりきっちりと散形状になっていないものが好きで、小さくてサイコロのような蕾が開くと、肉厚のぼてっとした小さな花卉の花が咲く。

そして仄かな香りがある。また、定番のチューリップも好きだった。なかでも一番好きだったのはメントンという品種。背が高く、少しサーモンがかったピンクの花。花卉がなんとも言えないくらい優しい色をしている。何かでひどく疲れていた時、店先のバケツの中で咲くメントンに気付き、とても癒されたことがあった。季節の移ろいと共に巡り会う小さな花々から、毎日少しずつ色の魅力を教えてもらっていた。

この地球上に存在するたくさんの色に出会えるお花屋さんは、その時の僕にとって唯一無二の素敵なお花場所だった。少なくとも、僕が海のなかの世界を知るまでは……。

あれから約十数年が経ち、僕は水中写真家になった。特に、ここ数年間は海の中の色を意識しながら撮影している。そんな僕にとってアジアの海は原色に溢れ、とても好きなフィールドでもある。なかでもお気に入りのパプアニューギニアやインドネシアの海。特にインドネシア・メナドには、絵の具をぶちまけたようなエリアがあり、ここ数年は何度も通っている。

お花屋さんから海のなかへ、表現の舞台を変えた。「海のなかはきっと、この地球上にある全ての色が揃っているのだろう」と憧れを抱く僕の創作活動は、きっと終わることがないだろう。

お花屋さんから 水中写真家へ